



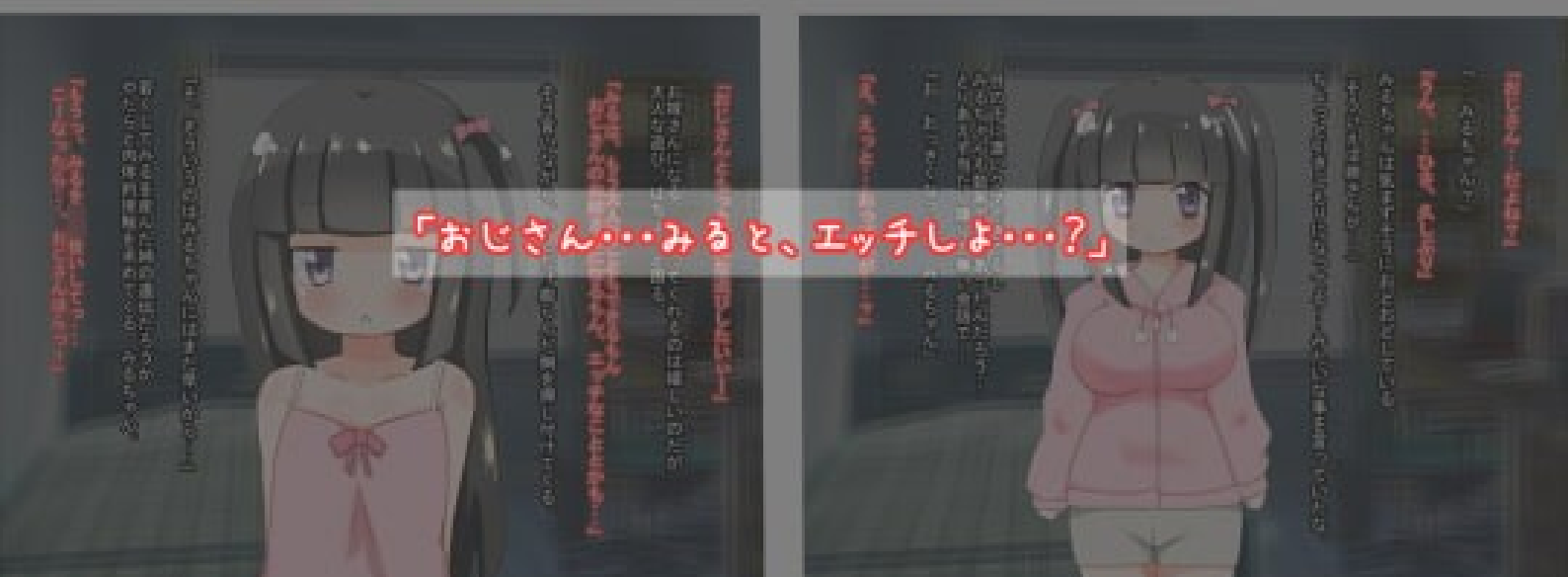
おすつと、おじさんずーと
うさぎさんずーと
たかたんぽよ……♡

依存姪っ子は
おじさん精子で孕ませ希望です♡



「おじさんのお嫁さんになるもん」と
ちょっと過激なアピールをする、煙のみるちゃん。

うんなみるちゃんと数年ぶり再会したが…
「みるは、おじさんのお嫁さんだから…」
あの時の思いはあんまり変わっていないようで…



「おじさん…みると、エッチしよ…?」



おっばいも、おま◎こもおじさんのモノ。
大事な大事な処女も…
お尻も子宮も卵子もぜ～んぶおじさんだけのモノ。



基本7枚+立ち絵2枚
ストーリー差分83枚



依存姪っ子は
おじさん精子で孕ませ希望です♥

「はあ…そろそろヤバイ…」

とある理由から無職になった俺は
姉の家に世話になっているのだが…

階下から、バタバタと走る音が聞こえる。
足音は階段を昇って、真っ直ぐに俺の部屋に向かっていようだ。

「おじさんおじさんっ！」

「あ、おじさん！居た！」

「や、やあ…おかえり、みるちゃん」

「この娘は、みるちゃん。
姉の子であり、つまり俺の姪っ子だ。」

「おじさん今日もみるとあそぼー♡」



「何度も言ってるけど、
俺はまだおじさんって歳じゃないよ、みるちゃん」

「いいのいいの、おじさんでも
ちゃあんと、みるが面倒みてあげるから♡」

みるちゃんが、体を密着させて纏わりついてくる。
これが「そろそろヤバイ」理由である。

「ねーねー、おじさん
なにで遊ぶ？なにで遊ぶ？」

「そうだなあ、じゃ、じゃあゲームでも一緒に……」

俺の提案にみるちゃんが
あからさまに不服そうな顔をする。



何故だかわからないが
みるちゃんは俺のことを非常に気に入られたらしい。
それが、懐いてくれる、レベルならまだ可愛いのだが……

「むー、みるもつと他の遊びしたいなあー」

「おじさんともっと大人な遊びしたいー」

お嫁さんになる、と言ってくれるのは嬉しいのだが
大人な遊び、はちよつと困る。

「みるは、もう大人なこともできるもん
おじさんのお嫁さんになるもん、エッチなことかも…」

そう言いながら、少しだけ膨らんだ胸を押し付けてくる。



「ぞ、そういうのはみるちゃんにはまだ早いから…」

若くしてみるを産んだ姉の遺伝だろうか
やたらと肉体的接触を求めてくる、みるちゃん。

「もうっ、みるを子供扱いしてっ…
こーなったら…、おじさんほらっ!」

「じゃーん」



スカートをまくり上げ
ドヤ顔でぱんつを見せてくる、みるちゃん。

「ふふん、おじさん興奮した？
みるの、おぱんつ見て興奮したでしょー」

純真なドヤ顔は可愛いけれど
その行動に呆れてタヌ息が漏れた。

「みるちゃんのパンツなんて見ても興奮しません」



さっさとパンツを下ろしたみるちゃんが
真っ白で綺麗な下半身をさらしていた。

「み、みるちゃん！おまた、おまた見えてるからー」

狼狽えはするが
視線はみるちゃんの割れ目から離せない。

「うん♡みるのおまた見ていいよー
おじさんなら、みるのヒッチナはおまた見せてあげる♡」

「お、おまつ、おまん…」

「あ、やっぱりいいー♡
おじさん、みるのおまたに興味津々だっ！」

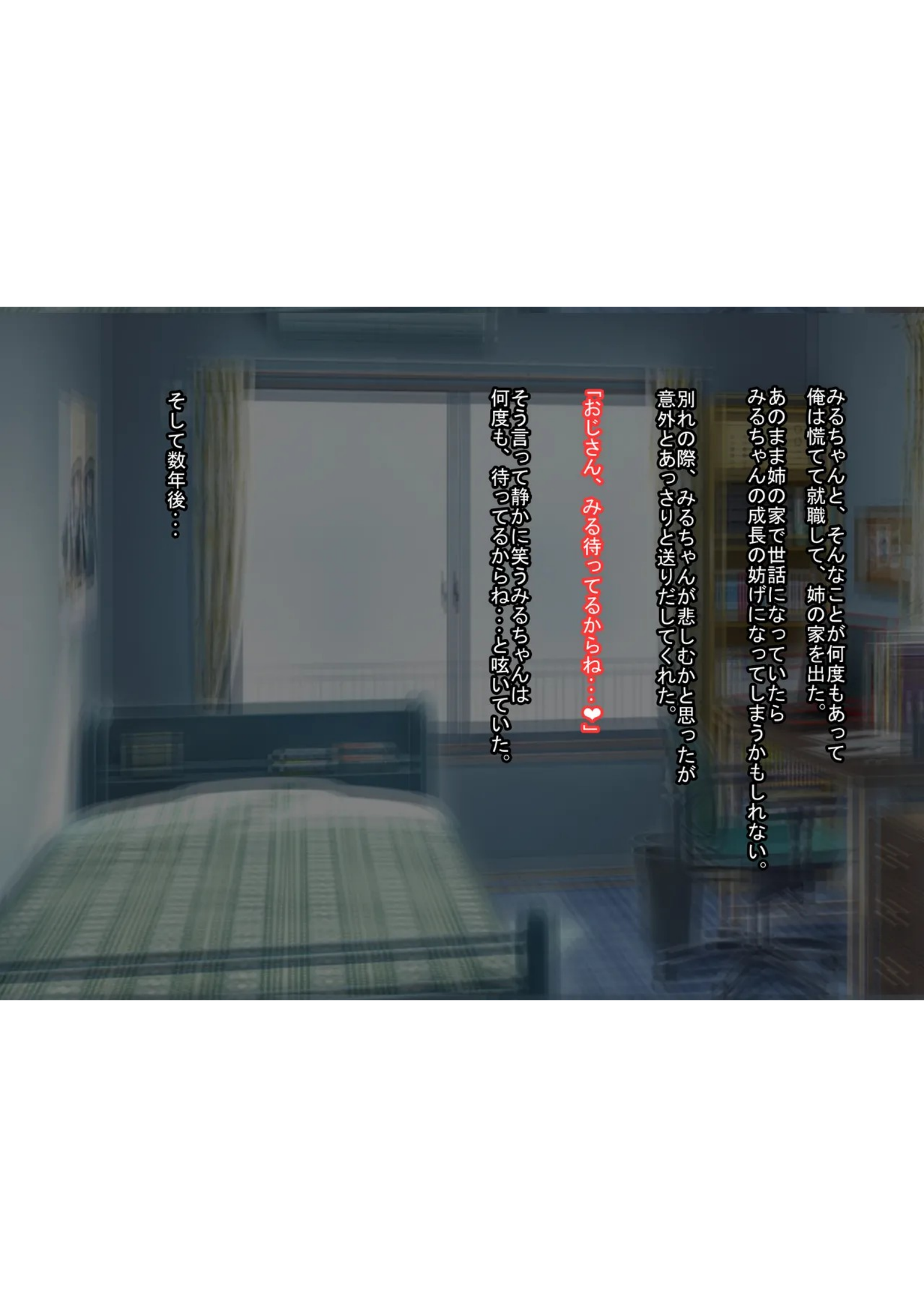
止めなければと思っても
初めて見る女の子の卑猥な割れ目に目が離せない。

「ほらほら♡好きだけ見ていらんだよ♡」

♡♡♡

「…この無毛で
誰にも遊ばせたいのなら無垢な割れ目。」

「綺麗すね…♡♡♡」



みるちゃんと、そんなことが何度もあって
俺は慌てて就職して、姉の家を出た。

あのまま姉の家で世話になっていたら
みるちゃんの成長の妨げになってしまいかもしれない。

別れの際、みるちゃんが悲しむかと思ったが
意外とあっさりと送りだしてくれた。

「おじさん、みる待ってるからね…❤️」

そう言って静かに笑うみるちゃんは
何度も、待ってるからね…と呟いていた。

そして数年後…

「戻ってきてしまった…。」

仕事でへまをやらかして無職になった俺は
再び、姉の家で世話になることになったのだ…。

「ありがとう、姉さん。つーかごめん」

「いいのいいの、気にしない気にしなさい
それより、みるもずっと会いたがってたから喜ぶわ〜」

昔の思い出を掘り起こしてみるちゃんの姿を思い浮かべる。

「あの頃はお嫁さんになるとか言ってくれてたなあ…。」

しかし、俺が再びこの家に世話になると決まった時も
荷物を運びこむ時も、その姿を見せることは無かった。

「まあみるちゃんも今更おじさんが相手じゃなあ…。」

そりゃそうだ、と思う。

むしろ小さな頃の
あんな思い出が嫌で会いたくないのかもしれない。

「彼氏とかもいるのかなあ…。」

コンコンッ

「ん、姉さんっ。」

「おじさん……だよな？」

「……みるちゃん？」

「うん、……ひき、久しぶり」

みるちゃんは気まずそうにおどおどしている。

(そういえば姉さんが……)

ちよつと引きこもりになってる……みたいな事を言っていたな。



目の下に濃いクマできてるし
みるちゃんも数年で色々あったんだろう……
とりあえず当たり障りの無い会話で……

「お、おつきくなったね、みるちゃん」

「え、えつと……おっばいが……？」

「いや、えつと
そこだけじゃなくて…全体的にね」
予想外の返しに俺がドモってしまった。

「おじさんは変わってない…かも」

「あ、ははは…酷いなあ
これでも色々成長したつもりなんだけど」

「みるが好きなおじさんのまま…よかった♡」



みるちゃんがなにかポツポツ言っているがよく聞こえない。
とりあえずジョークの一つでも言っごまかそう。。。

「ま、まあおじさん仕事ばっかで
成長したって言っても、彼女の一人もできなくてさー」

「……うん」

「おじさんいまだに童貞だよーって、ハハハ」

「童貞……ふふ♡」

(お、ウケたかな……?)

ちよつときこちない感じだけど笑ってくれたようだ。
やはり今時の子だから、ちよつと下ネタくらいがウケるのかな。

「みるも、……彼氏いないよ」



「そっか、みるちゃんも今はフリーなのかー
可愛く育ったのにもったいないぞー?はは」

「うん……ずっと、いないよ
おじさんの事……ずっと、ずっと好きだったから……」

「……えっ」

「これからよろしくね、おじさん……♡」

みるちゃんの発言に空気が固まった。

何やらご機嫌そうに、くすくすと笑いながらみるちゃんは自室へと戻っていった。

「い、いや…引きこもりのせいで

ちよっと内気になってるだけかな…？」

昔と同じで発言が過激なだけで、普通に接してあげればもしかしたら引きこもり脱却の力になれるかもしれない。

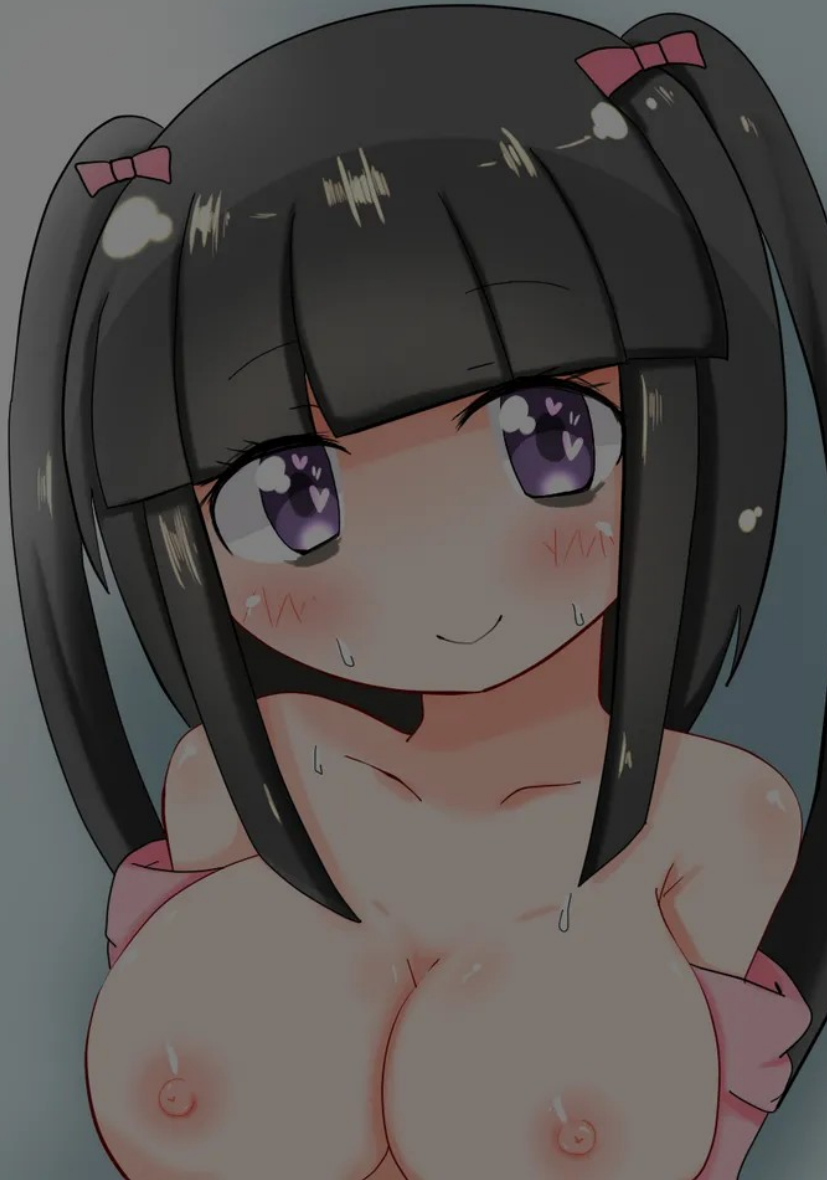


「ようし、そうと決まれば

荷物整理が落ち着いたら、ゆっくり昔話とかしてみよう」

しかし…そんな決意は予想外の形で裏切られるのであった…。

姉とみるちゃんと俺、3人で夕食を終えて
みるちゃんと昔話でもしようかと、彼女を部屋に呼んだ…のだが。



「お・じ・さん…♡」

なんでこんなことになった。

「おじさん、どうしたの…？」

「どうしたの…？
みるのおっぱい嫌い…」



昔と比べて、非常に豊かに膨らんだ胸をさらけだして
潤んだ瞳で俺を見つめる、みるちゃん。

「みる…ずっと待ってたんだよ、おじさんが帰ってるの…」

ちよっと状況に頭がついていかない…
というかみるちゃんが体を擦りつける様に密着してる。

「おえ…おじさん
みるのおっぱい♡ おじさんの為におっぱい大きくなったんだよ…」

「あ、みるちゃん…♡♡♡のは好きな人♡♡♡」



「みるちゃん…♡♡♡」

いや、みるちゃんの、なんと♡♡♡が…♡♡♡
空気に本気で俺の事を想ってくれた…♡♡♡なの♡♡♡が。

「あ、あのあの俺重直は♡♡♡♡♡♡の♡♡♡♡♡♡…」

慌てふためく俺の腕を抱くように
生のおっぱいをぎゅっ♡♡♡押し付け♡♡♡て♡♡♡。

「おじさん♡みるはね、ずっとずっと…
ずーっと待ってたよ？…ダメ？」



おじさん♡

みるちゃんが、俺の手を掴んで自分の胸へとそっと誘う。
初めて触る女の子のおっぱいは、温かくて柔らかかった。

「…わっわわ…やわっ…」

「お・じ・さ・ん♡
怖がらなくていいよ…？
みるのことがおじさんの好きにしていいたよ…？」


しばらく夢中で触っているところとみるちゃん、息が荒くなる。



『おじさつ……ん、触り方……えっちいよお♡』

そんなこと言われてもエッチな事してるんだから仕方ない。というか加減とか上手いとならば……。

『おえ、おじさん……おっほいだはははららら』



みるはそう言うとベッドに腰かけ大きく足を開いて、大事な部分を見せつけてきた。

「おじさん……みるの「こ」も……触る？」

「ほ、ほら…みるのまんこだよ…おまんこお…♡」

姪っ子のぞ「は、昔見たままの
つるつるで無垢で綺麗な割れ目だった。

「お、おまんこ…しかもパイパン…♡」

ニキ

16#

16#

「うん…？みるの、お、おまんこ…♡
おじさん好みの…おまんこかな…♡」

「うん、うん…綺麗なH回しだね…お、おまんこ…♡
うん、うん…綺麗なH回しだね…お、おまんこ…♡」

「うん、うん…おじさん…♡
うん、うん…おじさん…♡」



「ほ、ほり…見て？
みるの雌まんこが…お、おじさんに愛されたいよって
おまんこのえっちなお汁が…いっぱい溢れちゃうの…♡」

「みるちゃん…そんな♡手な言葉ばっか覚えて…」

「昔おじさんが隠してたエッチな本で覚えたのお…♡
おじさんに喜んでもらいたくて…♡」

「おま」

「おま」

「おま」

「じゃ、じゃあ触るよっ」
みるちゃんのおまんこ、触っちゃおうよっ

「え、うん…♡
みるのまんこ、えっちなまんこ…触ってっ」

「んっ♡んあぁっ♡♡♡」

割れ目を指でなぞると、みるちゃんが小さく喘ぐ。指先にはぬるつととした愛液が糸を引いた。

「うわ…めっちゃくちゃ濡れている…みるちゃん、おっぱい触られてこんな興奮したんだ？」

「んっ♡」

「んっ♡」

「んっ♡」

「んっ♡」

「うん…♡おまんこ汁でいっぱい濡れちゃうの…♡おじさんは、いっぱい濡れちゃうエロチなおまんこはきゅん♡♡」

「好きにきまっ♡」

もっと奥までみるちゃんの全てを見る為に濡れた割れ目を指で思い切り広げた。

「あっ、あ…見られてる…♡
みるのえっちまんこ…全部見られちゃってる…♡」

広げて見ると、みるちゃんの膣肉が濡れて卑猥に光り
雄を期待する雌だとアピールするようにビクビクと動いていた。

「恥ずかしいよお…♡」

くはぁ…♡

回ではその言っているが、
抵抗のそぶりすら見せず、
卑猥なおまんこをわらわら
「みるちゃん、H回すきなんだよ…」



「お、おじさん…童貞なんだよね…
じゃ、じゃあみるのおまんこが初めて見る、おまんこだよ…♡」

「そっだよ、俺が初めて見たおまんこ」
みるちゃん「ん…この…エツデなおまんこなんだよ」



「あ、あのね…みるも、し、処女だからあ…♡…♡…♡」
おまんこ「見られちゃうの初めてで…♡…♡…♡」

「そう言われて広げたおまんこを覗くと
膣口を覆う様な薄桃色の薄いヒダが処女の証を主張していた。」

「あっあっ♡見ってるぅ…おじさんが
おじさんが、みるのおまんこ広げて処女膜見てるよお…♡」

みるちゃんが躊躇無く繰り返す淫語が興奮を高め
ズボンの中で息子が痛いくらいに勃起しているのがわかる。

「あ、あ……おじさん……の
お、おちん……ちん♡おっきしてる……♡」

無言でズボンを下ろし
みるちゃんに見せつけるように息子をさらけ出した。

「おちんちん……♡
おじさんの……かちかちの……勃起ちんちん♡」

「みるちゃん……挿入れてらっ♡」

みるちゃんは短い吐息を漏らしながら頷いた。



「あつ、あつ。。。おちんちん。。。っ
処女膜に当たってる。。。えっちな。。。ちゅーしちゃってる。。。♡」

龟头部分しか挿入れてないのに
みるちゃんの粘膜が奥へ奥へと誘うように絡みついてる。

「みるちゃんの処女、もろっからねっ。。。っ」

「うん。。。♡おじさんの為に、と、とっておいた
みるの初めておまんこ。。。だから。。。♡」

「んん。。。っ」

弱々しい抵抗を奥に押し込む様に
ぐっとなんて入れて、一気に腰を突き入れた。



「んっ……んあぁあっ……」

「うわ……みるちゃんの処女まん……熱っ……」

「ぷっん、と処女膜を破いた感触の後、柔らかい肉がぎゅーっとなぐらいた締め付けてくる。」

「みるちゃんっ、そんなに締め付けたら……っ」

「膣全体が雄に射精を促すように熱い愛液と一緒に絡みついてくる。」

「お……おじ……さんっ、おまんこが……おじさんのおちんちんで……おまんこが熱いよ……っ」

「みるちゃん射精ちゃうっ……っ……っ」

「処女喪失の痛みに喘ぐみるちゃんを他所に初めての雌穴の感触にたまらず射精してしまった。」





「んひゃああああああんっ♡
みるのまんこっ♡処女まんこに…♡
おじさんの童貞精子がびゅるびゅる出るっ♡♡♡」

初めての中出しの快感に、一瞬気が遠くなる。
まるで雄の子種を一滴も残さないようにと
膣肉に締め付けられ、吸いだされるように勢いよく射精してらる。

「んんん」

「んんん」

「まんこっ♡おまんこっ…中出しされてるっ♡
おじさんの精子が、中でたばたばた当てるのっ♡♡♡」

「んんん」

「んんん」

「はあっ……♡はあ……んっ♡
中出ししてもらえたあ……は、初めてだったのに……♡」

「あっ……みるちゃん……中出しっ……」

「しちゃって「めん……」言おうとした所で止まる。
みるちゃんは”してもらえた”と言った。」

16#

16#

ユレユレ♡
♡♡♡

「嬉しい……♡お、おじさんの精子……♡
おじさんの精子が、みるのおまんこの中……♡」

みるちゃんの中から引き抜くと同時に
愛液と精液の混ざった卑猥な液体が首を立てて溢れ出した。

ゴロゴロ♡
ゴロゴロ♡

「おじさん……♡み、みるの処女まんこで……
き、気持ち良く……童貞卒業できた……♡」

ニツヨリと笑顔で問いかけてくる。
みるちゃんの言葉は本心から発言のようで
本気で処女喪失と中出しを喜んでるようだった。



「みるちゃんの処女……
気持ち良すぎてこんなに出ちゃったよ」
頭を撫でてやる、昔のようなスミエの笑顔を見せつけた。

「ねえ……おじさん♡」



みるちゃんは、硬いままの俺の息子に「白い指を這わせ
そのまま、そっと自分の膣へと誘う。

「ね♡初めてのの…せ、セックスだから…
まだみるのおまんこ、ぐちゅぐちゅすぽすぽ…したいよね？」

「もう一回してもいい？ 処女だし痛くない？」

「う、うん…♡あのね…熱い精液…
びゅるびゅるって子宮に出しても…
すい…き、気持ちいいの…♡」

「あ、あ、もう一回♡おまんこをくちゅくちゅ」



中出した精液が潤滑油になって
かき回す度に、ぐっちゅぐっちゅと卑猥な音が響く。

「みるちゃんっ、みるちゃんのおまんこ」

「おちんちんっ♡おじさんのおちんちんっ♡……♡
みるの子宮に届いてるのはお……奥にすすんぐ……♡」

「気持ちいいっ♡おまんこ気持ちいいよ♡
もっどぐちゅぐちゅしてっ♡……♡
おじさんの精液……まんこの中に擦りつけてっ♡」

「おまんこっ♡」

「ぐっちゅっ♡」

「突きする度、それに合わせるように
みるちゃんの雌の部分か、きゅっきゅっ」と締め付ける。

「お、おじさん……。っ、もうダメっ♡
みるダメなのっ♡おまんこイっちゃうのお……。っ♡」

みるちゃんが体を震わせて迫る絶頂を全身で訴える。
膣内も激しく痙攣して、少しでも早く精液を搾り取るうと
強く締め付けて射精を促してくるのを感じる。

ぐちゃっ♡

「みるちゃん、俺ももうイクよっ♡
もちろん」のまますで中出しするからねっ♡」

「うんっ……。っ中出し……。っ♡
おじさんの精子♡みるの処女まんこで受精させてえ……。っ♡」

今更抜く気なんて無い。
みるちゃんの返事の途中で
もう精液は膣内で射精する態勢になっていた。

ずっ♡ふっ♡

「射精すよ射精すよっ♡
みるちゃんの処女まんこに連続中出しするよっ♡」

みるちゃんが、満足そうにお腹を撫でながら
自分の膣内から零れる精液を、潤んだ瞳で見つめていた。

「ああああ…気持ちよかった…
うう、遂にみるちゃんとセックスしちゃうとは…」

「みるも…お、おじさんのおちんちん…♡
いっぱい中出ししてもらえて…気持ち良かった♡」

「おじさんので…に、妊娠したかなあ♡」

「ああ…後先考えずに中出ししたけど
中出しってつまりそういう事なんだよなあ…。」

「おじさん…ぶっしたの…。」

「姉さんどう説明するか——」



勢いに流されて、姪っ子のみるちゃんと関係を持ってしまった。
いや…童貞の俺に「ずっと好きだったから」って言って
生おっぱい押し付けられたら断り切れるわけないよ、うん。

「どりあえず…明日の朝で姉さんに相談というか報告するか…」
家に置いてもらっている以上
先延ばしにしてもいいことは無い…。

「はあ…責任かあ…」

家庭崩壊やら妊娠やら色んな不安が頭をぐるぐる駆け巡り
裸のまま幸せそうに眠る、みるちゃんを抱きながら夜は更けていった。

翌朝――

3人で朝食を囲みながら、俺は意を決して……

「あ、あの、姉さん……ちよっと大事な話というか……」

「あー、みるの……」

さらっと答える姉。

まさか……昨晚の情事の音を聞かれていたのだろうか
考えてみれば、周りの事など考える余裕は無かった……

「いやあ、あんた押しに弱いタイプだとは思ってたけど
まさか1日で落ちるとは……みるーハイこれ」

「ハイ」

なにやら姉が、しゅしゅとといった感じで
みるちゃんに1万円を渡していた。

「え……なに、えっと……なに？」

「いやね？みるが何日であんたを落とせるかって賭けてたのよ」

あつけらかんと笑う姉の姿に
力が抜けてその場にへなへたと座り込む。

「つーか俺が落とされるのは前提の賭けなんかい」

「だってあんた意思弱いじゃない
しかも、みるは娘ながら巨乳だわ可愛いわで……
ぶっちゃけあんた……この好みでしょ？」

――南無。

「お・じ・さん・ん♡」

「みるちゃっ……て、うわっー」

仕事に行く姉を見送って部屋に戻ると、みるちゃんが待っていた。

「……♡」

何も言わずにするすると下着をおろし俺の目の前で下半身をあらわにする。

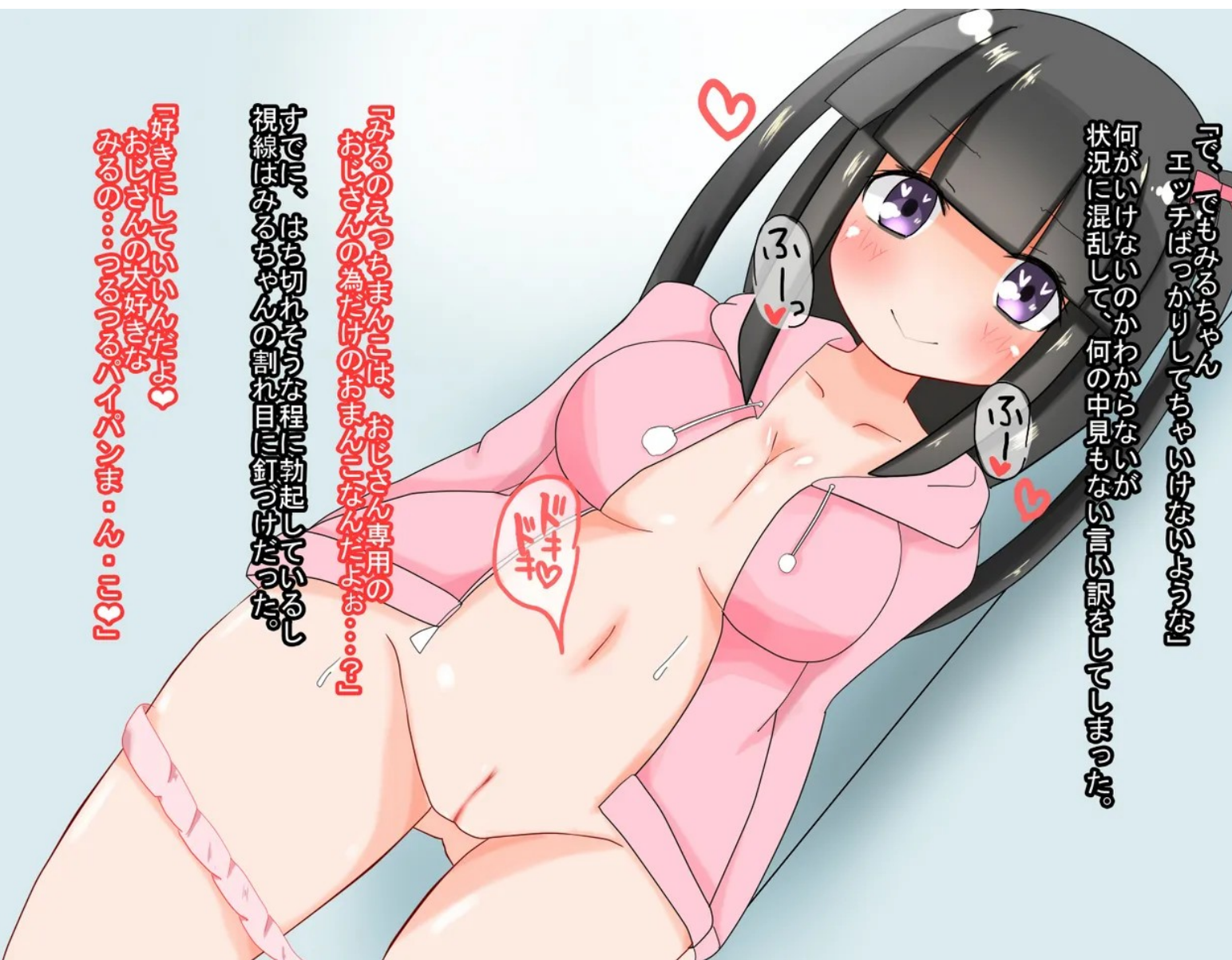
「み、みみみるちゃん、まだお昼前だけど……?」

「……おじさん♡」

「で、でもみるちゃん
エッチばかりしてちゃいけないよな」
何がいけないのかわからないが
状況に混乱して、何の中見もない言い訳をしてみました。

「みるのえっちなまんこは、おじさん専用の
おじさんの為だけのおまんこなんだよ……？」
すでに、はち切れそうな程に勃起しているし
視線はみるちゃんの割れ目に釘づけたまま。

「好きだしていいんだよ♡
おじさんの大好きな
みるの……っうるうるパイパンま……ん♡」



淫語で攻めてくるのズルい。
昔の工口本、盗み見されていたみたいだし
淫語とかパイパンとが大好きなの完全にバレている。



ふーっ♡

ふーっ♡



ドキ♡


「ほあ、じゃあ一回だけだからね」

1回ならいいなんて理由は無いが
平日の昼前にセックスするいう状況に
とりあえず言い訳をしておく。

「ふふ、やった……♡」

エッチしてもらえる……♡
みるのおまんこ可愛がっててもらえる……♡

ベッドに腰かけ、隣をポンポンと叩くと
みるちゃん嬉しそうに隣へと座り、身を任せてきた……。



みるちゃんは待ってましたとばかりに、さっさと服を脱ぎ
生まれたままの姿で、ころんと横になり大きく足を広げた。

「みるちゃんの体…やっぱりエロ…」

「おじさん好みに…そ、育ってる…?」

片手では零れるような爆乳に、真っ白で大きなお尻
ぴったり閉じてるっつるのすじまんこ…

「完璧」

「ブイ」

親指をぐっと立ててやると
間髪入れずに、みるちゃんもブイサイン。

1日経って改めて見ても
相変わらず完璧なパイパン
まんこだ…。
見ているだけで、勃起しすぎて痛い。

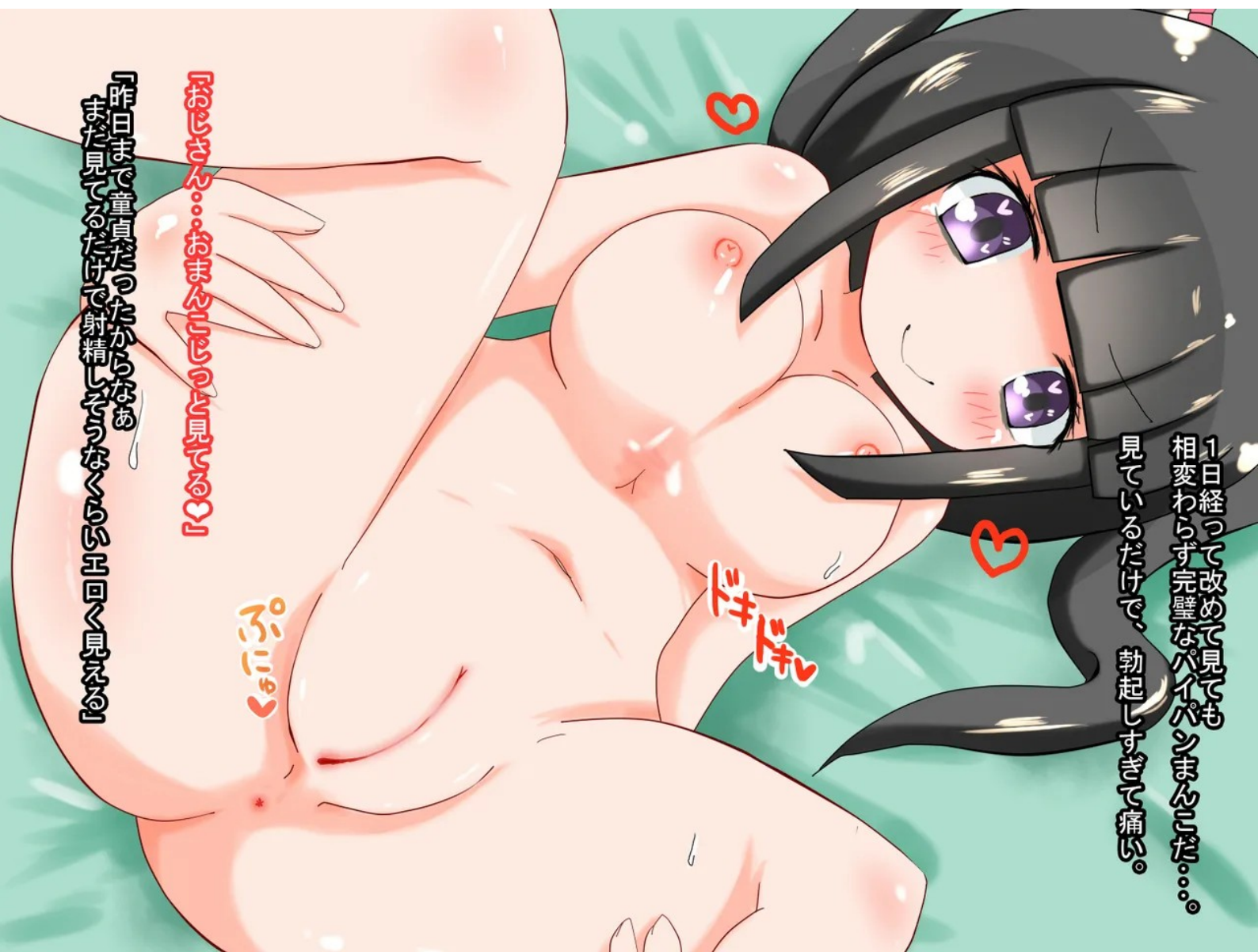


ドキドキ

「おまのまんこ、見たいよ」

ふふ

「昨日まで童貞だったからなあ
まだ見るだけで射精」

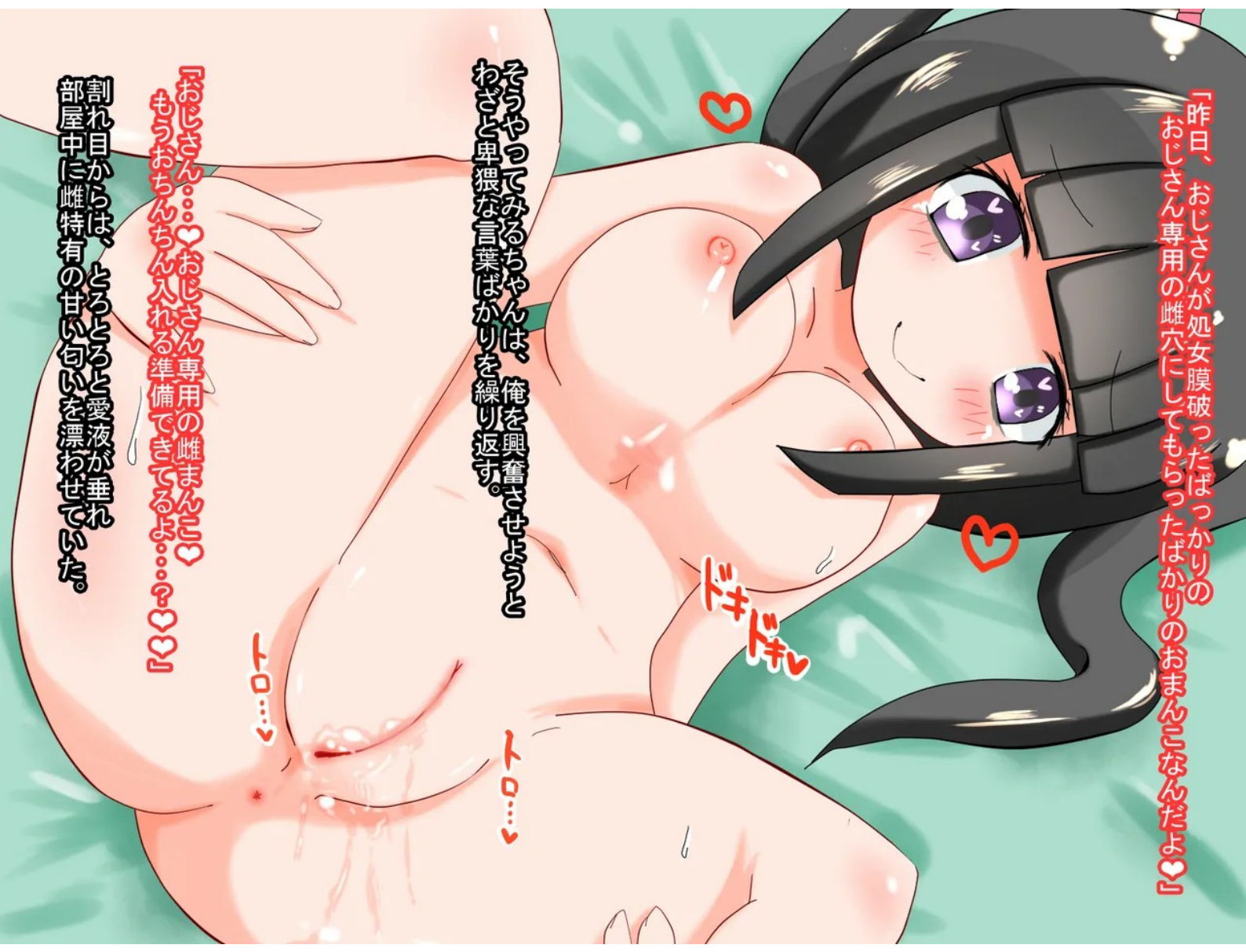


「昨日、おじさんが処女膜破ったばっかりの
おじさん専用の雌穴にしてもらったばかりのおまんこなんだよ♡」

そっやってみるちゃんは、俺を興奮させようとして
わざと卑猥な言葉ばかりを繰り返す。

「おじさん……♡おじさん専用の雌まんこ♡
もうおちんちん入れる準備できてるよ……♡♡♡」

割れ目からは、とろとろと愛液が垂れ
部屋中に雌特有の甘い匂いを漂わせていた。



「ふわあ……っ♡
これ……き 今日一日……
ずっとこれが欲しかったよお……っ♡」

挿入すると、反射的に膣肉がぎゅっと締め付けてくる。
心なしか、昨日よりも俺のものに馴染む気がした。

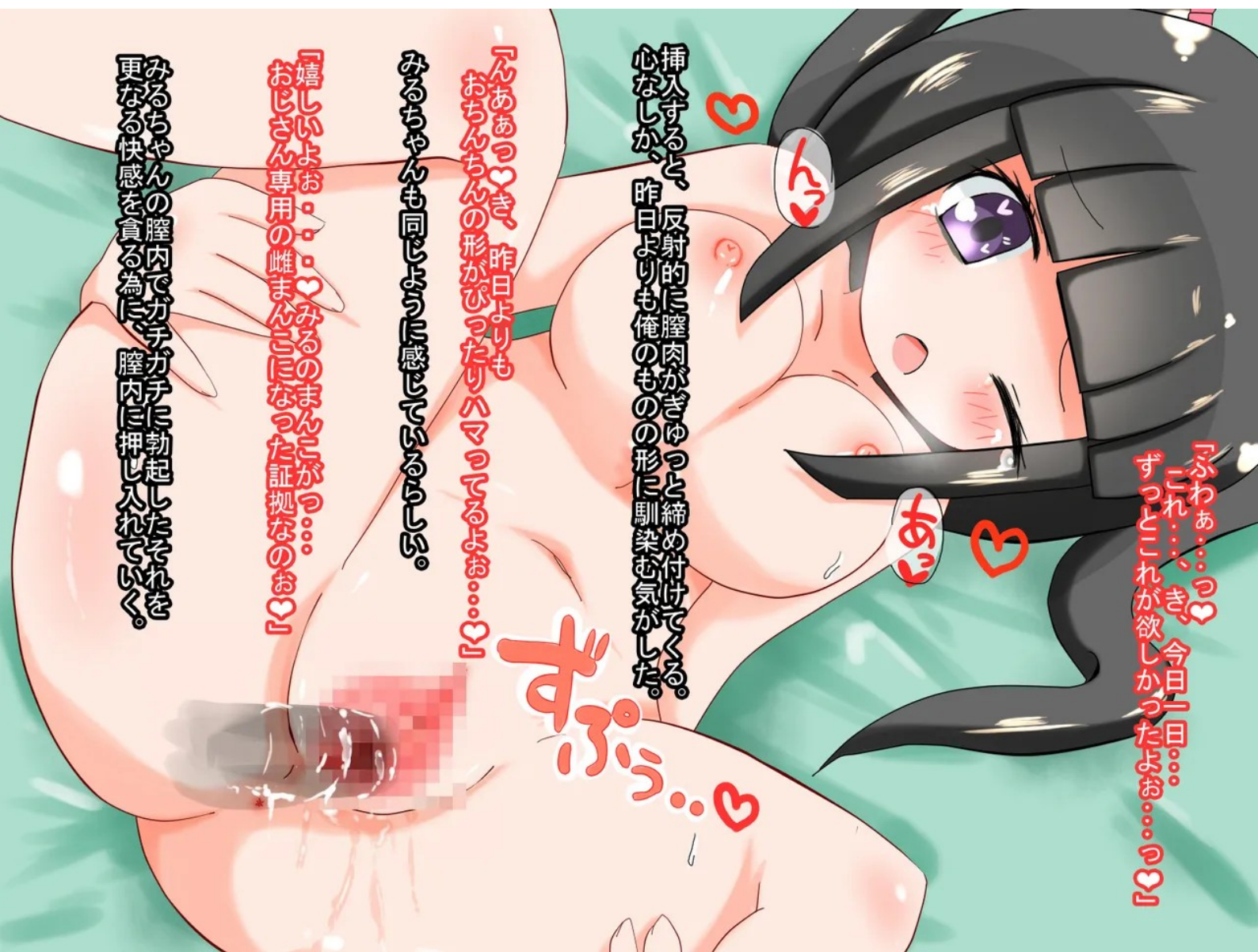
「んあぁっ♡き、昨日よりも
おちんちんの形がびったりハマってるよお……っ♡」

みるちゃんも同じような感じでうなるわっ。

「嬉しいよお……♡みるのまんこがっ……
おじさん専用の雌まんこになった証拠なのお♡」

みるちゃんの膣内でガチガチに勃起したそれを
更なる快感を貪る為に、膣内に押し入れていく。

ざぶらっ…♡



「あああつ、みるちゃんのおまんこ」
「突きするだけで射精そうになるっ…」

「ああんっ♡あつ、あんっ♡
おじさんっ…い、いきなり激しいよっ♡」

「ううんっ、気持ちいいっ♡
おまんこの中ぐちゅぐちゅ擦れるのすきっ♡
おまんこっ♡おまんこ気持ちいいよお♡」

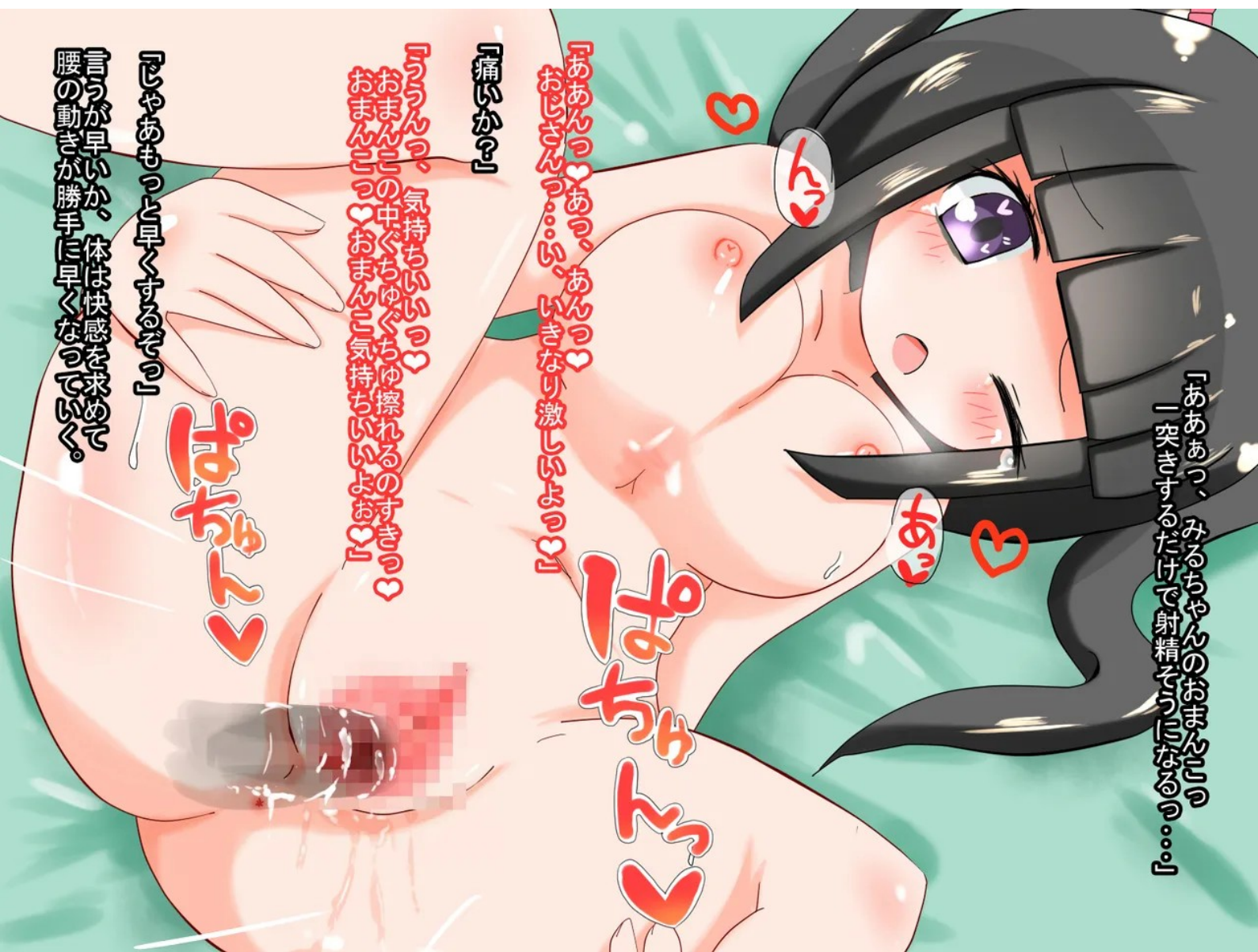
「痛いかな」

「あまもっ♡早へもねっ♡」

「言っが早いかな、体は快感を求めて
腰の動きが勝手に早くなっでいく。」

ぱちん♡

ぱちん♡



「おじさんっ♡みるイっちやうっ♡
おじさんのおちんちん気持ち良すぎて…♡
とろとろえっちおまんこでイっちやうよお♡」

昨日も感じた、膣内の締めり
みるちゃんがいっく時の合図だ。

「俺もっ…射精すよっ！
おまんこで欲しっか言っよっ！」

「なかっ♡まんこの中に欲しいっ♡
処女膜破ったばっかのおまんこっ…
おじさんの精子受精させてえっ♡♡」

「いっくっ！俺の精子受精しるっ！」

ぱちん♡

ぱちん♡

キュンレ

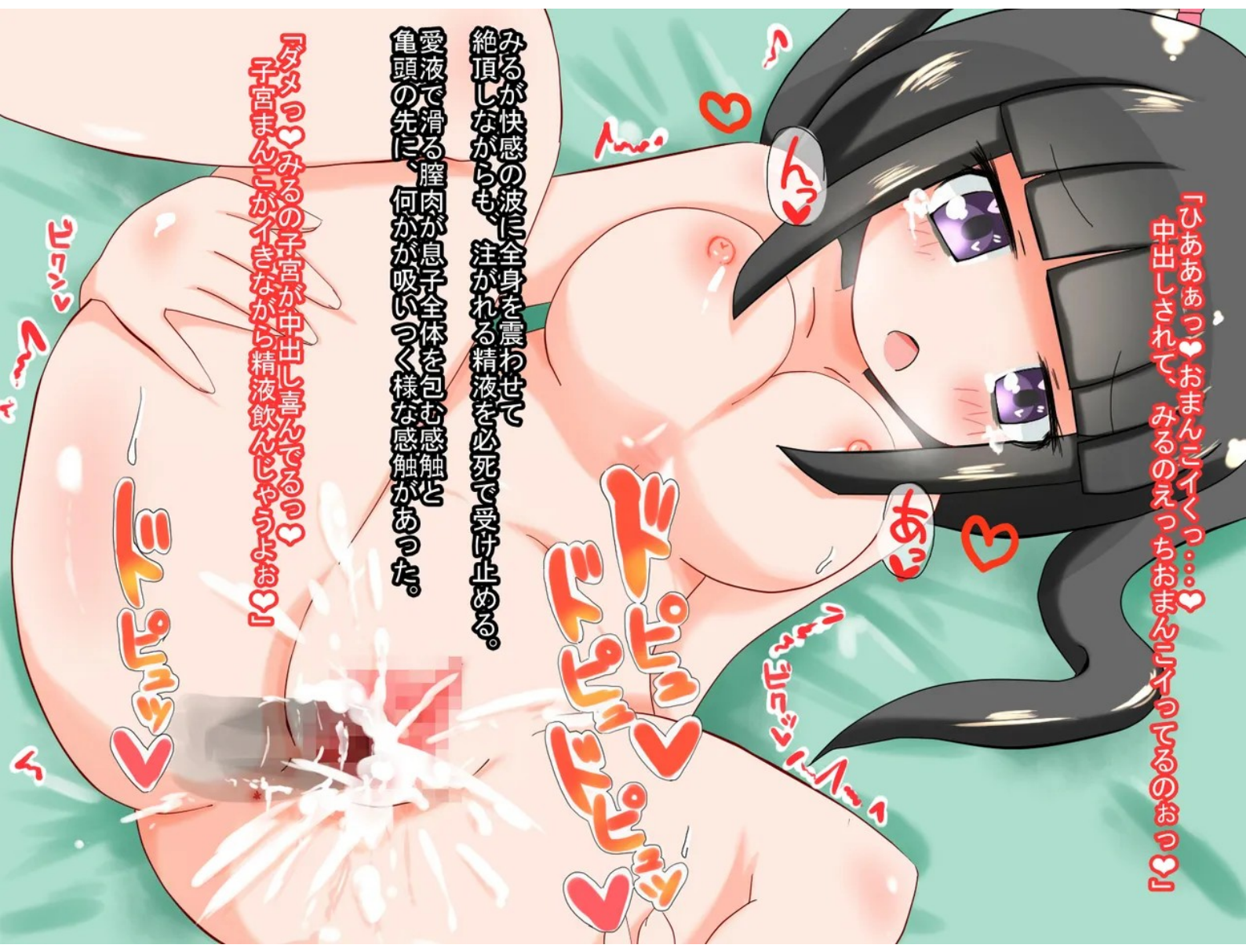


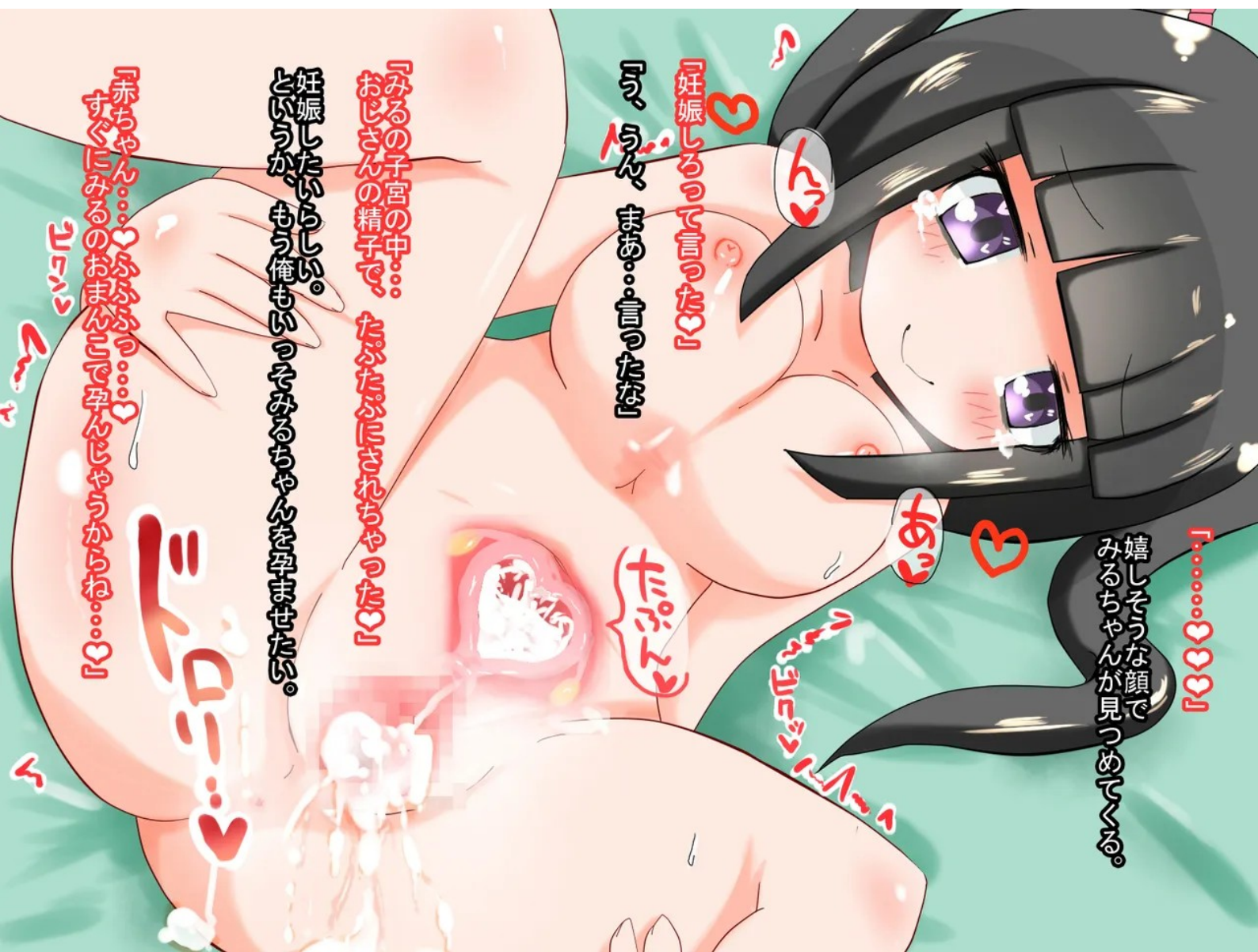
「ひあああつ♡おまんこイっくっ……♡
中出しされて、みるのえっちおまんこイってるのぉっ♡」

みるが快感の波に全身を震わせて
絶頂しながらも、注がれる精液を必死で受け止める。

愛液で滑る膣肉が息子全体を包む感触と
亀頭の先に、何かが吸いつく様な感触があった。

「ダメっ♡みるの子宮が中出し喜んでるっ♡
子宮まんこがイきながら精液飲んじやうよぉ♡」





『……♡♡♡』

嬉しそうな顔で
みるちゃんが見つめている。

「妊娠して言った♡」

「うん、まあ……言ったな」

「みるの子宮の中……
おじさんの精子で、
あなたを産みました♡」

妊娠したらしい。
というが、もう俺もらっしやんやんを産ませるさ。だから、
と。

「赤ちゃん……♡ふふふっ♡……♡
すぐにみるのおまんこで孕んでやうからね♡」

ニヤニヤ♡

みるちゃんは幸せそうにお腹を撫でる。
子宮内に満ちた精子を愛おしい我が子の様に。

「いや、流石に早いって」

「…お、おじさん？」

(まさか妊娠までのスピードも賭けたりしてないだろうな)

「…ないよ」

一瞬、心を読まれたのかと動揺したがどうやら違っらしい。
みるちゃんはおなかを撫でながら、残念そうに言った。

「妊娠」

「あ、ああ。それってわかるの？」

「今日、だ、大丈夫な日だから…」

安全日ってやつか。

「ねえ、おじさん…♡」

みるが危険日の時でも…中出ししてくれる？」

逆プロポーズかこれ。

「とりあえず仕事探すよ」

みるちゃんが妊娠した時、不安にさせないように」

みるちゃんがパツと笑顔を咲かせ、抱き着いてくる。

結局その日だけでも6回も中出しさせられてしまうのであった…。

みるちゃんと恋人になって1週間：（なったのか？）俺も、姉の紹介でついに新しい職が見つかった。

職と収入が安定すればみるちゃんとの関係にも、負い目を持たなくてもいいだろう。親且つ姉公認だし：。

しかし、相変わらずみるちゃんは引きこもりのままだ。簡単な買い物以外、外に出ることはなく俺とセックスばかりの墮落した生活をしている。

「やっぱりその辺もちゃんと言わなきゃ駄目だよなあ。。。結婚するにしても、ある程度の自立はしてもらわないと。。。」

「お・じ・さ・ん♡」

「あ、ああ。。。みるちゃんどうしたの」

まあ、みるちゃんが部屋に来る時は99%セックスしたい。。。だから今更聞くのもアレなのだが。。。。

「。。。ふふ♡」

「おじさん……お、お仕事決まったんだよね……」

「あ、うん、来月からはまた社会人に復帰だよ」

「どうやら改めてその事にお祝いの言葉を言いに来たらしい。」

「またセックスだろうな、と疑ってしまっただけで罪悪感が……謝罪の気持ちも込めて、ありがとね、と頭を撫でてやる。」

「あ……♡」

「おじさんに撫でてもらうの……好き♡」



「頭を撫でてやると、子供の様に喜んでくれるので……最近でみるちゃんの頭を撫で慣れてしまった。」

「それでね、おじさん……♡
みるからお祝いの、ぷ……プレゼントがあるの……♡」

「これは素直に嬉しい。」

「おー、ありがとだね、何をくれるのかな？」

「はいっ……♡おじさん……♡」

わかった。

目にもとまらぬ早脱ぎで
お尻をふりふりと、股間を見せつけてくる。

「みるちゃん、エッチしたいだけでしょ」

「お……、お祝いエッチ……？」

なんじゃそりや——
まあでも真つ白で綺麗なお尻と
ぷにぷにな割れ目を見せられれば、
反射的に勃起してしまう。

「おじさん……おまんこ……しないの？」

「します」

「ブイ♡」

「おじさんの大好きな…みるのおまんこだよ
お、おちんちん…入れちゃっていいよ？」

触って濡らしてあげないと…
と思うが、すでにみるちゃんの割れ目からは
愛液が漏れだし、いやらしい糸を引いていた。

「ね、ね…？」

遠慮なく挿入れさせてもらおうことにする。
みるちゃんの割れ目に息子をあてがうと
くちゆりと粘膜が音を鳴らす。



「んんんっっ♡♡
これえっ…おじさんのおちんちんが
ずぶっっっっっっ…は、入って来る感じ…しゅきゅ…♡♡」

「俺も、みるちゃんのさ
あつたがいおまんこ」に包まれる感じめっちゃすき…♡♡」

柔らかい膣肉が、きゅっきゅと締め付けてくる。
最初の頃は痛いくらいに締め付けてきたのに—

「んっ…み、みるのおまんこ…♡♡
おちんちんの形覚えちゃってるっ…♡♡」

みるちゃんの言う通り
膣ビダの1枚までが、ぴったり笑全体に
密着するように絡みついて愛撫してくる。



「お、おじさん…あつ♡気持ちいいね♡
おちんちんとおまんこぐちゅぐちゅにして
エッチしちゃうの…気持ちいいねえ…♡」

「あつ、みるちゃんのまんこ♡
俺の形に馴染んで最高に気持ちいい♡」

どうしても挿入すると
主導権を握られているよな気がする。

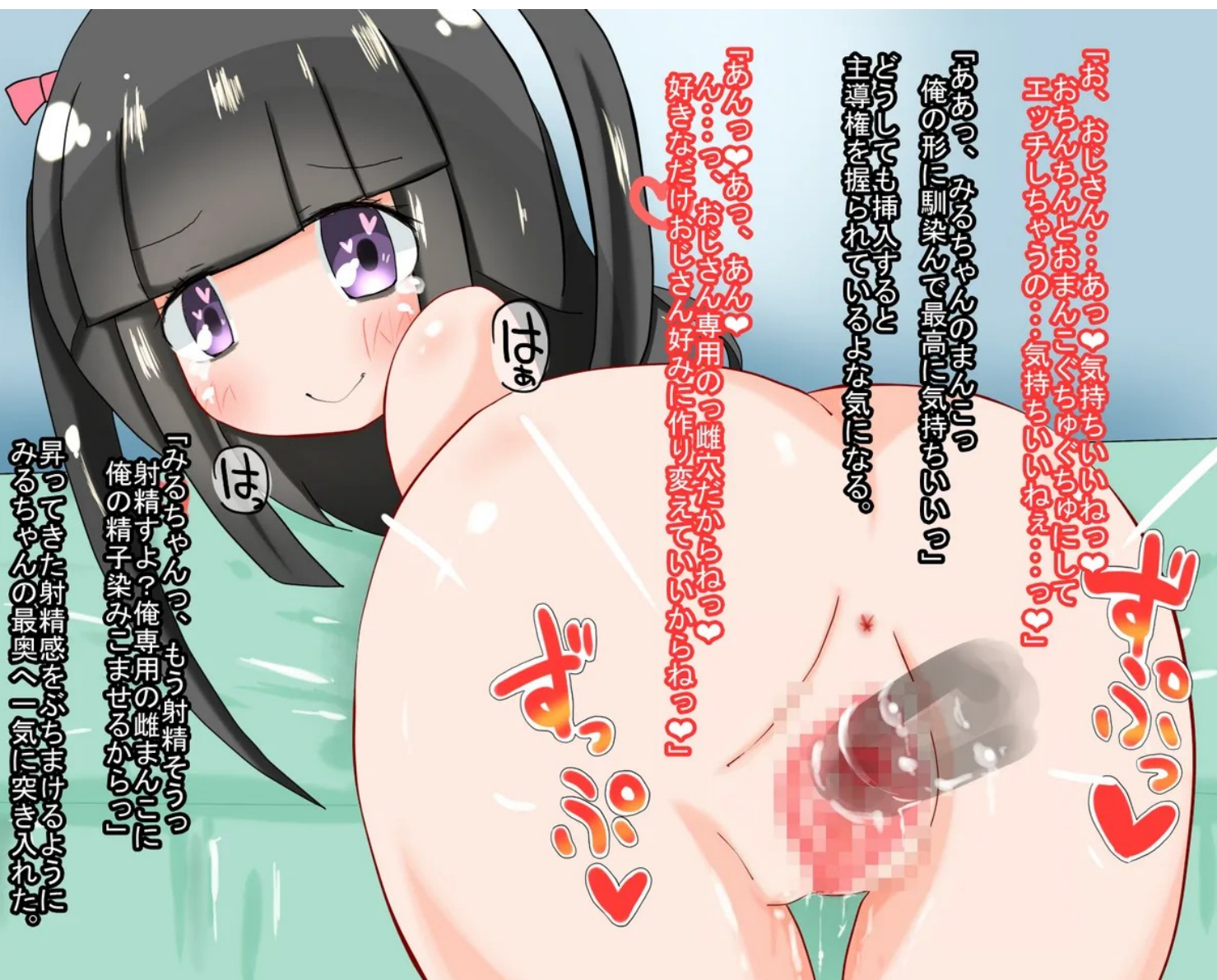
「あん♡あつ、あん♡
ん…♡おじさん専用のっ雌穴だからね♡
好きなだけおじさん好みに作り変えていいからね♡」

ずっ♡
ずっ♡

ずっ♡
ずっ♡

「みるちゃんっ、もう射精そっつ♡
射精すよ？俺専用の雌まんこに
俺の精子染みこませるからっ」

昇ってきた射精感をぶちまけるように
みるちゃんの最奥へ一気に突き入れた。



「ふあああ♡熱々の射精の…♡
子宮にひびくわぁんわぁん♡」

「あああ…みるちゃんっ
精子受精してっ…俺の精子っ…」

「んっ♡しゅわんわん♡
ちやんと子宮まんじゅで精子しゅわん飲んでるよお♡」



「んあー…気持ち良すぎる…」

自分専用だと言う雌穴に
思う存分子種を注ぎ込んで、雄としての満足感に浸る。

「んっ…♡
せっかく中出ししてもらえたの♪…
おじさんのどろどろ孕ませ精液い
こぼって零れちゃうよお…♡」

膣からどろりと溢れる精液を見ると
目の前の雌に種付けしたという充足を感じる。

ゴポッ
ゴポッ…♡

シロ…ご…ご…

精液を垂らすまんこを見てみると
少し悪い感情が芽生えてしまった。

「みるちゃん…ちよっと」

俺はみるちゃんのお尻をぐっと掴んで
もう一つの小さな穴に目がけて一気に息子を突き入れた。

「んぎやあっ!?!♡♡♡」

垂れた愛液や精液で濡れていたせい
意外とすんなりとアナルにも挿入っ
てしまった。

「おじさっ…おん…おん…おん…♡♡♡
おまんこじゃないよお…♡♡♡」

ぬ…ぶ…ぶ…

少し苦しそうな声を漏らす
がここ最近、みるちゃん
とやりまくっているおかげ
でこれが快感に耐えている
声だど、すぐにわかった。

「みるちゃんはこつちも
おまんこみたい
に精液欲しがつてるみ
ただけよ。」

少し意地悪してやると――

「あんっ♡も、もっ…♡
お尻おまんこはっ♡
プレゼントするつもりだったのに…♡」

どうやら就職祝いのプレゼントは
アナル処女だったらしい…
意図せず受け取ってしまった。

「お尻はごっっ」

「思ってたより気持ちいい…♡」

流石みるちゃん。
天性のエロ姪っ子だなあ。



「やあ遠慮なく…ん」

膣とは、感じる刺激が違うのか
みるちゃん、の喘ぎもいつもと違う。

「きゃんっ♡ひあっ♡んんっ♡」

「みるちゃんのお尻も
うっせでも気持ちさらよ、」

締め付けキマすぜっ…」

ぢゅあっ♡
ぢゅあっ♡

ぢゅあっ♡
ぢゅあっ♡

「うんっ…みるもっ♡
初めてのお尻エツチ気持ちいいのっ♡」

アナルの強すぎる締め付けに
どんどん射精感が昇ってくる。

「みるちゃん、お尻にも中出しっ♡」

「うんっ…!!みるのお尻まんこにっ
おじさんの精液中出ししてえっ!!♡♡」



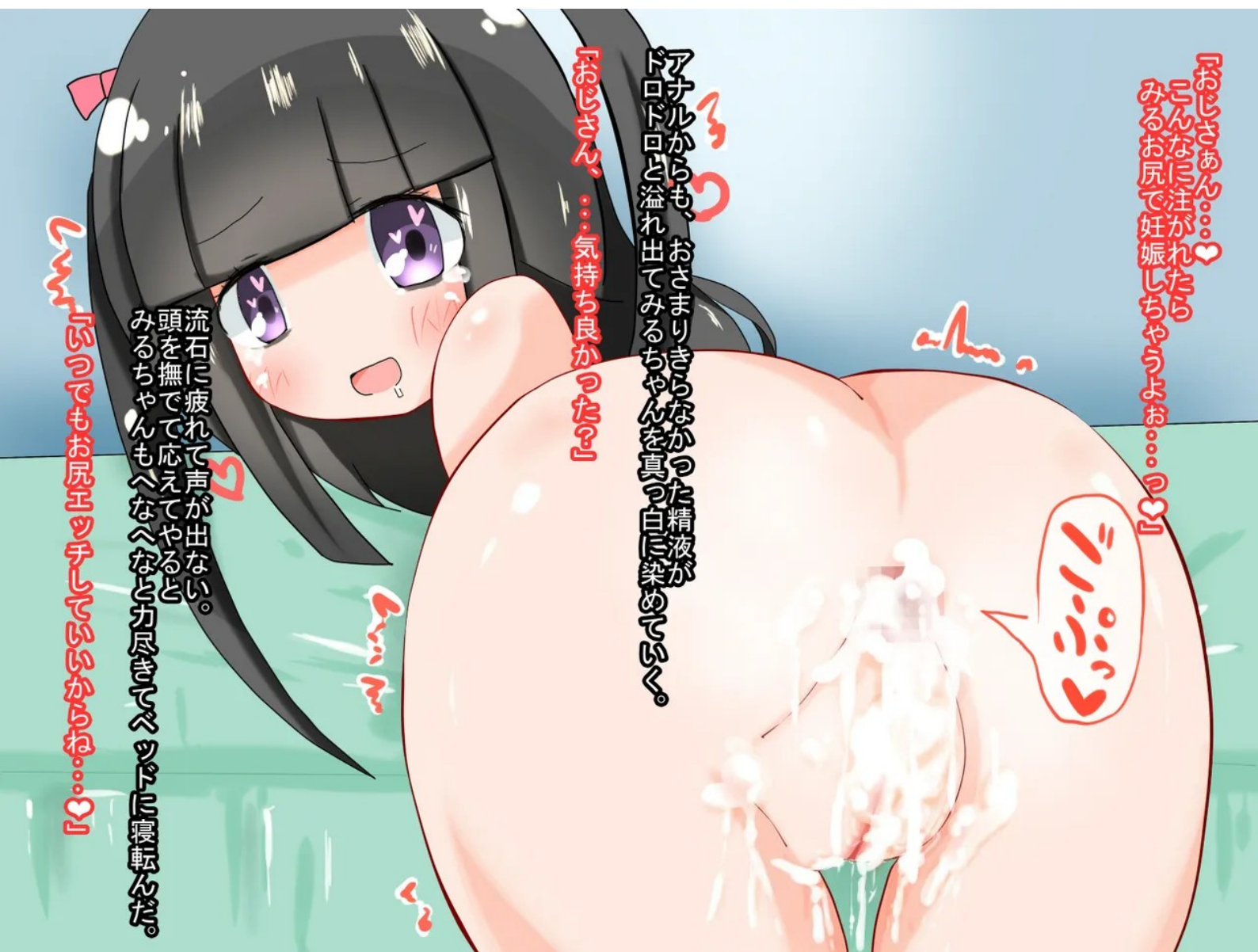
「おじさあん……♡
こんなに注がれたら
みるお尻で妊娠しちゃうよお……♡」

「アナルからも、おさまりきらなかった精液が
ドロドロと溢れ出てみるちゃんを真っ白に染めていく。」

「おじさん、……気持ち良かった？」

「流石に疲れて声が出ない。
頭を撫でて応えてやると
みるちゃんもへなへなと力尽きてスベスベに寝転んだ。」

「……お尻もお尻も……♡」



そのまま二人でごろごろと休憩し
回復したら、どちらからとも言わず求め続けた。

「みるちゃんっ…もう…何回目？」

「はあ…はあ…
お尻に3回…おまんこに4回い…」

7回も中出しエッチしていたらしい。
まあ、遠からず妊娠するだろうなあ…みるちゃん。

「もう夕方、そろそろ姉さんも帰って来るか…」

慌てて二人で、ぐちゃぐちゃになった布団を整える。
整えた所で飛び散った体液はどうしようもないが…

そして数日が経ち…
遂に新しい職場への出勤日も間近に迫った頃…

いつもとは違った感じでみるちゃんが部屋に入ってきた。
どことなく落ち着きが無い感じで、そわそわしている。

「お、…おじさん…
あの、あのね…みるね…♡」

ベッドの上に座り、しゆるしゆると服を脱いでいく。
すっかり見慣れた裸をあらわにし
片足を持ちあげるようにして、大きく股を開く。

「しよつか、みるちゃん」

そりゃあ俺もエッチする気満々なので
パンツ以外を脱ぎ捨て、みるちゃんに覆いかぶさると――

「みるね……
今日……危険日だよ……♡」

みるちゃんの言葉に、胸が大きく揺さぶられる。
一瞬、試されているのかと思ってしまうが、
期待に満ちたみるちゃんの目を見て確信する。

「おじさんっ……♡」

息を荒くした、みるちゃんも
それ以上は何も言わずに割れ目を見せつけ
期待した瞳で、俺をじっと見つめる。

「みるちゃん、今からさ」

みるちゃんのおまんこに中出しするから」

「うん……うんっ……♡」

「みるちゃんのまんこに
おじさんの子供孕ませるからね」

「うん……♡」

パンツを下ろして
みるちゃんに息子を見せつける。

ガチガチに勃起して
今から眼前の雌を孕ませるための雄の肉棒。

「種付けセックスするぞっ……!!」

「おじさん……っ♡み、みる……っ♡
今から、お……おじさんの子供、妊娠する……っ♡」

「そっだよ、みるちゃんは今から
危険日の子宮におじさんの精子を
いっぱい中出しされて赤ちゃん孕むんだよ」

「も、もう欲しいっ♡おじさんはやくっ♡
みる、孕むのっ♡、妊娠するのっ♡」

「じ……っ♡」

ただひたすらに子種を求めて
愛液で下半身をびちゃびちゃに濡らすみるちゃん。
この雌を孕ませたい、俺の精子を受精させたい——



「ふあああぁっん♡
きたっ♡おちんちんきたっ♡
みるの危険日おまんこにおちんちん入っちゃったあ♡」

「みるちゃん、まんこ締め過ぎ…っ」

処女膜を破った時と同じような
膣肉がむちゃくちゃに絡みついてくる。

「だっっっっ、だっっっ♡妊娠♡
妊娠させてもらってるの♡孕みたいの♡」

完全に雌としての本能で動いているな…
精子脳ならぬ子宮脳？

「ずぼずぼしてっ♡はやくはやく♡
みるの危険日おまんこで
いっぱい気持ち良くなっっっ♡」

おっっっっ♡



「あつーおちんちん膨らんだぞ♡
精子出るっ？みるを妊娠させちゃう孕ませ精液っ♡」

みるちゃんのおまんこは
もう俺の射精の兆候を完全に把握してるぞ。

「そうだよ、もう射精なんだよ！
みるちゃんの危険日まんこに！
一発で絶対妊娠させてあげるからっ」

「孕んでいい？孕んでいいっ？
おじさん精子受精ちやうどっ？」

「おまんこ♡みるのおまんこ♡♡
おじさん専用雌まんこ孕ませてるっ♡♡」

「あああつ、孕んで！俺の精子で孕めっ！」
一番奥の子宮目がけて「一気に肉棒を押し込んだ。」





「危険日子宮の中いっせいで
卵子の逃げ場所無いっ♡絶対孕んだっ♡」

「あっ、あっ……♡
妊娠してる……今、絶対妊娠してる……♡
おじさんの精子が、みるの卵子に……♡
ちゅぶつて受精したのお……♡」

ん♡

お♡

「おじさん♡」

確実に妊娠したよ、と目が言っている。
女の子は感覚的というか本能的にわかるのだからっか？

子宮の中を満たしてもおさまりきらずに
膣から溢れ出てくる精液の量を見れば
男の俺でも確実に孕ませたな、とは思っ

ズクン♡

キュン♡

ヨダレ♡

「でも、おじさん...
まだまだ、し足りなからよ...♡♡」



結局、求められるままに
お互いが雄と雌としての本能をぶつけ合った。

数えきれない程、精を注ぎ込み
動物の様に盛りまくった。

気づけば夜は更け
日が昇ろうとしていた…。

「そろそろ姉さんが起きる…朝「はんを…って、うわ」
腰がガクガクと震えて立てない。

「みる、悪いけどちよっと起「してくれ…腰が…」

「み、みるも…動けない…腰震えて…」

なんで嬉しそうに言うの。

そして二人してなんとかリビングにたどり着き—

ズビクズビ

ズビクズビ

腰痛を我慢しながら3人で朝食を囲む。
妊娠させてしまった以上、これから色々頑張らないと…

「ねーお母さん」

「お、なにになに？」

「受精しました、ブイ」

「えっ」

突然のカミングアウトに思わず箸を落とす。
というか口が塞がらずに、みそ汁がだばあと零れた。

「み、みみみるちゃんっあのそのえっ」と

「ちくしょう、はいこれ」

姉がみるちゃんに1万円を渡す。


「おら『リン』」

「くそっ、2ヶ月くらいは持つと思ったのに」

落ちる事前提の賭けなのはもう諦めたが
俺、2ヶ月で姪を孕ませるか否かで賭けられてんのか。

「ん？あんた何か言いたいことあんの？」

「いえ…これからお仕事頑張リマス…」



どうやら姪っ子との生活は
まだまだ始まったばかりらしい…。

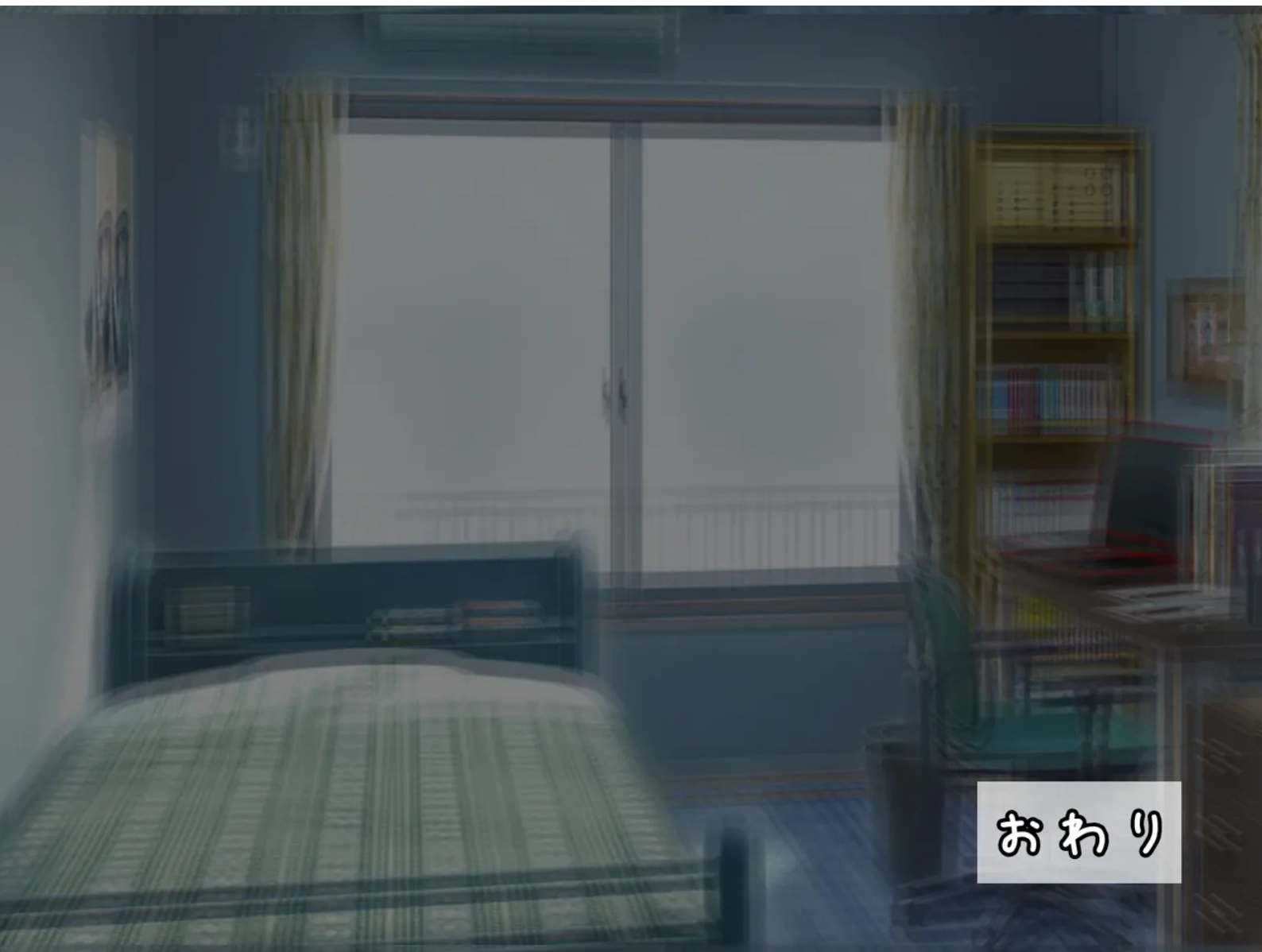
あ、もう姪っ子というか奥さんか—

「おじさん♡」

ニヨニヨ笑顔で見つめるみるちゃん。
——まあ、こんな人生も悪くないか。
慌てないでゆっくりいニヨじやないか。

「これからもよろしくね、パ・パ♡」

あ、慌てないで…頑張ろう…



おわり